慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J・D・チェンバーズ著 宮崎犀一・米川伸一訳 世界の工場 : イギリス経済史一八二〇 - 一八八〇
Sub Title	
Author	栗本, 慎一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.9 (1966. 9) ,p.1023(113)- 1024(114)
JaLC DOI	10.14991/001.19660901-0113
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660901-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第二章「社会経済の変貌」は、「英国の近代」が、何時訪れ、それがどのような変化を生んだかを、全体像として描出することに費されている。第一節「国民経済の屈折」において、著者は、十六世紀前半の未曽有の好況と後半の不況の、英国商工業に与えた影響を考察し、「絶対主義」の政策と呼ばれているものが、こうした経済変動、就中、世紀後半の不況の解決の仕方であるとするのである。

第二節「農業革命の進展」においては、前節で展開された十六世紀の経済変動に伴う農業分野の変革がとりあげられ、この変革が、従来から支配的な学説であった「ヨーマンリーの上昇」をもたらしたのではなく、全体として見れば、ヨーマンは、近代英国のトレーガーでもなく、まして「未来の産業の将師」でもなかったとされるのである。ヨーマンが近代英国形成の過程で埋没を余儀なくされた階層であったとすれば、近代英国の真の担い手は、如何なる社会層であったか。これこそ、著者の特筆する社会層としてのジェントリーであった。

「ジェントリーの勃興」が一方にあれば、他方にヨーマンリーの没落がある。近代英国国民文化の型があるとすれば、それはジェントルマン・イデアールであった。第三章「国民文化の生成」は、近代英国国民文化のパターンについての著者の優れた試みである。ジェントルマン・イデアールは、従来の騎士道倫理と外来の人文主義の習合の産物であった。他方、清教主義は、すぐれて英国土着の文化であった。多くの清教徒達は、十六・十七世紀の経済、社会変動の過程で路傍に置き去られた。英国文化は、両者のシュバンヌンクの中に展開し、革命後、両者は合成され、合理主義的経験的思考の流れ、経験論として結実したのである。

本書は、その歴史研究のパースペクティヴにおいて、又最近の英国歴史学界の動向を知る上で、極めて優れた研究書である。（ミネルヴァ書房・一九六六年三月一日刊・A5・四七五頁・二一〇〇円）

—安元　稔—

＊　＊　＊

天川潤次郎著

『デフォー研究』
—資本主義経済思想の一源流—

著者はこの書物を第三部第九章に分けている。第一部は「デフォー——時代と思想——」であり、その第一章は「産業革命前夜のイギリス経済」、第二章「デフォーの生涯とその論著」、第三章「経済思想」、第四章「政治思想」とに分れている。第二部では「経済時論」、第五章「英・蘇合併問題（一七〇七年）」、第六章「英仏自由通商問題（一七一三年）」、第七章「南海恐慌問題（一七二〇年）」となっていて、最後の第三部では「資本主義のヴィジョン」、その第八章「資本主義のヴィジョン」、第九章「イギリス経済の構造」となっている。全体を通してみて《ロビンソン＝クルーソ》物語の筆者としてのデフォー一個人の問題から、英国ジャーナリズムの開拓者の一人としての、また政界に出入し政治経済の問題には関心が深く、内外商業についてのすぐれた見識の持主であり、また著者はこの本のいたるところで述べているが、終始一貫中産階級的であり、非国教的である近代イギリス社会の典型ともいうべきデフォーの姿および当時のイギリスの諸問題を扱っている。更にデフォー個人について言えば、彼の著作は小説、パンフレット、政治および経済評論、旅行記、歴史など非常な数にのぼるが、その中で最も注意すべき著作は《事業論》（An Essay upon Projects, 1697）、《ロビンソン＝クルーソ》（Robinson Crusoe, 1719）、《イギリス商人大鑑》（The Complete English Tradesman, 1725）、などである。

デフォーの生れた一六六〇年のイギリスは、社会経済史的に見て一つの大きな転換期でもあった。一六四九年から一六六〇年の間における空位時代はいわゆる世界最初の『市民革命』をとげたもっともイギリスにとって輝かしい時代であった。とともに、それはこれより後、イギリスの数世紀にわたる繁栄の源ともなった商工業の担い手たる中産階級の地味な、それでいて確実な出現の時期でもあった。政治的にはチャールズ二世の王政復古が成しとげられ、共和制に終止符が打たれたかのように思えるが、これは過去への復帰を意味しはしなかった。かんたんにいえばイギリス革命が変革したものは、封建的諸制度のうちで、長老派＝商業資本の障碍になるものを排除し、手段となるものをのこして、イギリス資本主義が他にさきんじて本源的蓄積にすすむ道をひらいたのである。ここにおいて重商主義が典型的におこなわれたのは名誉革命（一六八八年）後のイギリスにおいてであり、この初期ブルジョア国家によって遂行された原始的蓄積の核心をなす経済的課程はつぎのごとくである。㈠、康価労働力の強力的な創出とその技術的な訓練。マニュファクチュア期を特徴づけるおびただしい浮浪者の就業強制、懲役場や孤児院でおこなわれたかれらの強制的陶冶、またさまざまの規制による賃金圧下や労働者確保のための移住禁止、更に外国熟練職人の来住奨励と自国熟練職人の移住禁止。特に歴史上著名なものとしては、エンクロージア運動の破壊性があげられる。㈡、さまざまの形における貨幣財産のつかみ取りとそれを産業資本へ転化するための諸条件強力的創出。なかでもイギリスの海賊によるスペインの銀船隊や植民地の略奪が、イギリスの原始的蓄積にとってはたした役割は無視できなかった。

最後に著者は、工業よりも商品の販売に一層興味を持ち、貿易、植民こそイギリスを興すものと考えたブルジョワジーの代弁者たるデフォーは、明らかに大英帝国膨脹論者であり、自由主義的な帝国主義者であったのである、と結んでいる。（未来社・A5・四五〇頁・索引三三頁・二、〇〇〇円）

—原田敏彦—

＊　＊　＊

J・D・チェンバーズ著
宮崎犀一・米川伸一訳

『世界の工場
—イギリス経済史 一八二〇—一八八〇』

一八二〇年代から、いわゆる「大不況」がはじまる一八七三年恐慌にいたるまでの時期こそ、イギリスが世界の工場として産業的にみても金融的にみても、世界に君臨し繁栄にふけった時期であるといえるだろう。イギリスの産業界のみならず、世界資本主義の中心基軸産業であったのがイギリス綿工業なのであった。

従来、この時期の研究は、一八世紀後半の産業革命の研究及び、二〇世紀の現状分析的研究の間であって、必ずしもこの時代の総合的研究が充分に行われていたとは言い難い。一九二六年に公刊された、サー・J・クラッパムの大著「Economic History of Modern Britain 3 vols」がこの期をも俯瞰し、概説書にW・H・B・コートの「A Concise Economic History of Britain from 1750. to Recent Times (1954)」〔矢口孝次郎監訳『イギリス近代経済史』ミネルヴァ書房〕があるが、チェンバーズ教授

のこの時期に対する総合的著述は概説的ながらすぐれた意義があるものと考える。

チェンバーズ教授は、現在ノッティンガム大学の名誉教授で、主著に地方史研究の嚆矢「Nottinghamshire in the Eighteenth Century (1932)」がある。

本書『世界の工場』(原名「The Workshop of the World」)は、元来イギリス経済史の概説書としてシリーズで刊行されたものの第二巻であって、その第一巻は、T・S・アシュトンの「The Industrial Revolution 1760-1830 (1948)」〔中川敬一郎訳『産業革命』岩波書店〕である。

本書の全体は次の八つの章に構成される。

第一章序説、第二章機械制工業と運輸業の発達、第三章農業と穀物法、第四章外国貿易と財政政策、第五章銀行業、信用、株式企業、第六章恐慌の年、第七章人口と都市の発達、第八章「産業国家」における労働者。

第一章で、イギリスが海運・信用業を通じて世界商業を支配していたこと、及びこの時期の全体的位置づけを述べている。

第二章はいわば工業の発展の全体的展望である。繊維工業を中心とした発達と、商業の拡大を支えた鉄道及び海運の発達を連関させてとらえている。

第三章では、一八七三年、七五年、七九年の不作によって「穀作借地農の密月の終り」が訪れるが、世紀中葉から着実な農業生産の発展があったことが述べられる。

第四章では、イギリス資本主義の発展に伴う海外市場の拡大を考察し、つづく第五・六章は第四章をうけて一八二〇—八〇年の時期にほぼ十年毎に起きた恐慌と、その間の熱狂的な投機や設備投資の過程を、海外貿易、資本市場、財政政策などを含めて総合的に追っている。教授が、イギリスが厳然として「世界の工場」であったことを認めながらも、外国貿易構造が依拠する「物的基礎」は「比較的脆弱な」ものであったのではないかと論じ、「世界の工場」の覇権は、金融・国際信用などを含めた総合的なものであったと論じているのは興味深い。

第七章は、産業化と人口のパラレルな発展によってよびおこされた論争をふまえて人口の問題を論じ、第八章では同じく産業化の過程での労働者階級の状態を検討している。

概説書であるが故に、充分詳細な議論ではもちろんないにしても、多角的に一八二〇年代以降のイギリス資本主義の姿を浮き彫りにしたすぐれた著述といえよう。

ただ、序説にいう「離陸」期の構造的解明や、なぜ「大不況」がこれまでの恐慌と違う長期性を有するようになったのかなどの指摘が欲しかったとは言える。全体に、すぐれた豊富で適切なデータで議論をすすめられているという点からみても、是非この点の考察をされたかった。しかし、これは概説書の範囲ではないのかもしれない。(岩波書店・昭和四一年三月刊・B6・二六七頁・五〇〇円)

—栗本慎一郎—

訂　正(本学会雑誌　第五十九巻第八号)

(七四頁上段　一・二　第二パラグラフ)

「……時間にのみ依存しており、技術進歩そのものは……」

を改めて

「技術進歩そのものは、時間にのみ依存しており……」

とする。

(七四頁上段　最終行)

「技術進歩率」→「技術進歩」

(七七頁上段　第一行)

「tについて積分すると……」

を改めて

「vについて積分すると……」

にする。

(八一頁下段　一〇行目)

「$s=\rho(0)\dfrac{1}{g+\delta}$」

を改めて

「$=\rho(0)\dfrac{1}{g+\delta}$」

とする。sは不要。

(八二頁上段　八行目)

「$\rho_0(t)=\rho(t-v)=\rho(0)e^{-(t-v)}$」

を改めて

「$\rho_0(t)=\rho(t-v)=\rho(0)e^{-\delta(t-v)}$」

とする。